

キルギス人日本語学習者の授受本動詞の誤用について

著者	アサノワ グリザル
雑誌名	言語科学論集
巻	17
ページ	35-46
発行年	2013-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/57264

キルギス人日本語学習者の授受本動詞の誤用について

アサノワ・グリザル

キーワード: 授受本動詞、誤用、視点、キルギス人日本語学習者

要旨

キルギス人学習者が日本語を習得する過程で使い分けに難しさを感じる項目の一つに授受本動詞が挙げられる。本稿では、日本語の授受本動詞について、キルギス人日本語学習者の誤用、習得の状況を調査した。その結果、初中級レベルの学習者には「あげる」と「もらう」の間の混乱が多く見られ、中級レベルの学習者は、授受方向は正しいが、視点を間違える傾向が明らかになった。つまり、学習者の日本語能力が上がっても、授受本動詞は習得しにくいと言える。

1. 研究の背景と目的

日本語授受表現は、本動詞と授受補助動詞の2つに分けられる。本動詞である「あげる」「もらう」「くれる」の3つの表現は、物の移動を表すために使う動詞であって、動詞によって物の移動の方向がきまるため、日本語学習者にとっては習得しにくい項目の一つとされている。また、困難さを生むもう一つの理由としては、キルギス語とロシア語¹を含め、多くの外国語が「あげる」「もらう」の2項対立であるのに対し、日本語は「あげる」「もらう」「くれる」の3項を使い分ける必要があることがあげられる。

これに加えて、日本語の授受動詞のウチ・ソト問題がある。人間の意識には周りの存在、社会を自分に近いもの、遠いものに分けるという概念があるように、日本の文化にもいわゆるウチ・ソトという側面があり、このウチ・ソトは言語にも強い影響を与えている。簡単に言えば、日本語では、家族、親戚、自分の会社の人などを話し手に所属するものにし、ウチと呼んで、発言もウチの概念に基づいて行われる。このウチ・ソトは物理的な区別というより、話し手の意識の問題である。このような、授受動詞のウチ・ソト問題はキルギス語やロシア語にはないため、学習者に難しいと言われている。

上記を踏まえて、キルギス人日本語学習者が「授受の場面でウチ・ソト²関係を判断

した上で適切な授受本動詞が使えるか」を明らかにすることによって、教師が授受本動詞を教える時の指導のポイントと、注意すべきところを見出すことを本研究の目的とした。

2. 先行研究

まず、日本語の授受本動詞「あげる」「もらう」「くれる」の特徴について簡単にまとめる。奥津(1983)によると、日本語の授受本動詞「あげる」「もらう」「くれる」は、主語の立て方(与え手と受け手のいずれを主語にするか)によって与え動詞「あげる・くれる」と受け動詞「もらう」が対立する。このような対立は他の多くの言語には見られないが、日本語の授受本動詞は、この主語の立て方による対立に加えて、「話し手の視点」の置き方によって使い分けられる。

宮地(1965)では、日本語の授受本動詞における与え手の位置と受け手の位置、「話し手の視点」の位置について述べている。つまり、与え動詞の「あげる」「くれる」は、両方とも与え手が主語になるが、「あげる」は、話し手の視点が文の主語におかれ(1.)、「くれる」は、話し手の視点が間接目的語におかれる(2.)。一方、受け動詞「もらう」は、受け手が主語となり、話し手の視点は文の主語におかれる(3.)。

1. 与え手が受け手にあげる話し手の視点→与え手
2. 与え手が受け手にくれる話し手の視点→受け手
3. 受け手が与え手にもらう話し手の視点→受け手

これまでに日本語学習者による授受本動詞の習得研究は数多くされてきた。坂本・岡田(1996)は、授受動詞の習得について、視点の置き方が正答率に大きく影響すると述べている。授受本動詞の誤用については、学習者の母語と日本語レベルによって異なり、「あげる」と「くれる」との混同は多くの学習者に見られると報告されている(坂本・岡田1996、尹2006)。

坂本・岡田(1996)、大塚(1995)、尹(2006)、田中(1999)によると、日本語学習者のレベルがあがるにつれ授受本動詞の習得が進むとされている。これに対して、堀口(1983)は、授受表現は日本語能力が上がっても習得しにくく、「文法的ではあるが日本語らしくない」文を使うという誤りが多いと述べている(4.と5.)。

- 4.「文部省が奨学金をくれたので、日本で勉強しています」(←文法的に正しい文)
- 5.「文部省から奨学金をもらって、日本で勉強しています」(←日本語らしい文)日本人なら、この文を言うのではないだろうか。文部省の奨学金はほしいという意志のある学生が自分で申請をしてもらうのであって、学生の意志に関係なく文部省が好意的にくれるものではない。

授受本動詞を使って、文法的に正しい文を作成する能力はあっても、日常生活の場面において授受動詞を正しく使える学習者は少ないように思われる。これまでの先行研究ではこの点について明確に検証しているものはあまり見られない。

3. 調査概要

日本語を主専攻とするキルギスのA大学の20名の学習者を本調査の対象にした。A大学の修学年限は5年で、日本語の授業時間総数は約1666コマ(100分/コマ)である。500コマから960コマまで日本語を勉強した学習者を初中級レベル(9名)とし、961コマから1380コマまで日本語を勉強した学習者を中級レベル(11名)とした。

授受の場面でウチ・ソト関係を判断した上で適切な授受本動詞が使えるかどうかを測るために質問紙を使った。質問紙は、8問からなり、全て選択問題である。各問ごとに1つの授受場面が絵と文章で示される(資料1を参照)。回答者はその場面に基づく絵を見て、どちらかの人物を主語にし、どちらかの人物を非主語にすることになる。その後、適切な授受本動詞をa. b. c. の中から選ぶ。場面を表す文章は日本語で書かれているが、場面の正確な理解を図るためにロシア語の翻訳も付けた。問題文には漢字が読めないことが原因で誤用となるケースを避けるために、ふりがなをつけた。

質問紙の問いで提示した場面は大きく3つの類型に分けられる。

1つ目は、話し手のためあるいは話し手に近い人々のために、第3者が物を与えたことを表す場面である(問2、5、6、7資料1参照)。問2は、話し手(母)が聞き手に対し、子供が友達にりんごをもらったことを話す場面、問5は、話し手(子供)が聞き手に対し、母が同僚にスカーフをもらったことを話す場面である。問6は、話し手(兄)が聞き手に対し、弟がマリアにCDをもらったことを話す場面、問7は、話し手(姉)が聞き手に対し、妹が妹の同僚に傘をもらったことを話す場面である。

2つ目は、話し手あるいは話し手に近い人々が第3者に物を与えたことを表す場面である(問1、3、8資料1参照)。問1は、話し手(学生)が聞き手に対し、田中先生が木村先

生にコップをあげたことを話す場面で、問3は、話し手(友)が聞き手に対し、友達は友達
の知り合いの中村さんに雑誌をあげたことを話す場面である。問8は、話し手(私)
が聞き手に対し、友達が友達の先生にネクタイをあげたことを話す場面である。

3つ目は、話し手にとって上下関係ではどちらも同じ立場の人で、親疎関係が異な
る人の間で物が移動したことを表す場面である(資料1問4参照)。問4は、話し手(後
輩)が聞き手に対し、ラオ先輩(話し手とあまり仲のいい先輩ではない)が友子先輩
(話し手と仲のいい先輩)に本をくれたことを話す場面である。

場面の内容には、堀口(1983)の調査などを参考に学習者の誤用が多いと予想され
るものを取り組んだ。

4. 調査結果と考察

4－1. 場面判断能力の結果と分析

正誤判断に関しては、ウチ・ソト関係を踏まえた上で物の授受方向を正しく表した
ものを正用とし、それ以外は誤用とする。また、誤用は、「意味の誤り」と「視点の誤り」
に分類した。意味の誤りとは、例文(1)のように授受本動詞の使用は文法的に正しい
が、与え手と受け手の位置づけが誤っているために本来のものの授受方向と全く正
反対になって、文の意味が正しく伝えられていないものである。一方、与え手と受け
手のいずれかが話し手(身内)であるかによって授受動詞が使い分けられる点が日本
語の大きな特徴である(山田、2001)。視点の誤りとは、例(2)と(3)のように文が正し
く表現されているが、その日本語の特徴である視点の置き方が間違っているか、不自
然な表現になるものである。

- (1)私は先生に本をもらいました。(→あげました)「私→他者」
- (2)理恵さんは私に傘をあげました。(→くれました)「他者←私」
- (3)先生は私にペンをもらいました。(→私が～あげました)「私→他者」

表1は、各問題ごとの、学習者の回答における全体的な正答率を示している。

表1 質問紙の授受表現に関する正答率

問	問 1	問 2	問 3	問 4	問 5	問 6	問 7	問 8
正答率 % (人)	45 (9)	0.0 (0)	45 (9)	50 (10)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	45 (9)

表1を見ると、調査問題の全ての正答率が50%以下であり、学習者にとって授受本動詞の習得がかなり難しいことが分かる。以下、学習者の授受の場面でウチ・ソト関係の判断を類型ごとに、また誤用を意味の誤りと視点の誤りの観点から分析を進める。

調査問題のうち、第1類型は「もらう」が正用になる問題で、正答率が全て0.0%である。この結果によると、学習者のレベルを問わず「もらう」ができていないことが分かるが、レベルによって誤用の質が違って来る。まず、中級レベルの学習者の約9割が「もらう」は使用せず、「あげる」と「くれる」を使用している。これは、①と②を見て分かるように、視点を間違っている(40例)。

①(問2)「子供の友達は子供にりんごをくれた。」

この例①は、文法上は問題がないが、資料1の問2の場面を見ると、子供の友達は話し手(母)に知らない人物であるということが分かる。だから、話し手は知らない人物から描くのではなく、自分に近い人物から描くのは普通のことである。

②(問2)「子供の友達は子供にりんごをあげた。」

中級レベルの学習者と違って初中級レベルの学習者の約8割は、授受本動詞の「もらう」を積極的に使用しているが、主語選択が適切ではなく、意味の誤りをおかしている(③)。

③(問6)「マリアは弟にCDをもらった。」

第1類型では、まず、学習者は与えられた場面の情報を処理せず、話し手から遠い関係の人を主語に選ぶケースが非常に多かった。つまり、学習者は日本語のウチ・ソト関係を考えずに、自分なりに文を作り上げていると言える。

また、中級レベルの学習者は、授受本動詞を使って、文法的に正しい文を作成する能力はあるが、ウチ・ソト関係を考慮して授受本動詞を使うことができていないことが例①をみて分かる。そして、問2では(資料1参照)、子供が話し手のウチの人であり、文の主語は「子供」になる。つまり、文法的な理解はあっても、与えられた場面で適切に使用できた学習者が非常に少ないということが示されている。

「もらう」授受本動詞における主語は、話し手に近いウチの立場にあり、また、物の移動の「受け手」であり、話し手の視点はその主語の「受け手」寄りであることを、学習者が理解していないことを表していると思われる。

第2類型は「あげる」が正用になる問題である。その結果からは、学習者のレベルによって誤用の質が違って来ることが分かる。

まず、中級レベルの学習者の回答例をみると、学習者が「あげる」を使うべきところに「くれる」を使用し(④)、視点の誤りをおかしている例が多く見られる(13例)。「くれる」は、受け手がウチの関係にある場合にしか使用できないことを、中級レベルの学習者が理解していないと思われる。

④(問1)「田中先生は木村先生にコップをくれた」

一方、初中級レベルの学習者は例⑤のように意味の誤りをおかして、「あげる」を使うべきところに「もらう」を使用している(15例)。その他に、「あげる」を使うべきところに「くれる」を使った例が1例ある(⑥)。

⑤(問1)「田中先生は木村先生にコップをもらった。」

⑥(問3)「友達は中村に雑誌をくれた。」

ここで、初中級レベルの学習者は第1類型と違って、話し手に近い関係の人を主語にしているが、「あげる」の代わりに「もらう」を使用している例が多く見られる。これは、学習者は授受本動詞の方向性をまだ理解していないか、もしくは覚え間違いをしているのではないと思われる。

第2類型の結果をみると、学習者は「与え手」、つまり、話し手と近い人を主語に置いているが、ウチ・ソト関係を考えた上で、正しい授受本動詞を使えているとは言えない。また、方向性が間違っているケースもみられる。

最後の第3類型は、「くれる」が正用になる問題で、その結果を見ると、上下関係では同じ立場の2人の中から主語を選ぶことは学習者にとって難しかったことが分かる。初中級レベルの学習者は第2類型と同じく、意味の誤り、つまり「もらう」の誤り(⑦)をおかしている(5例)。

⑦(問4)「ラオせんばいは友子せんばいに本をもらった。」

ここまで、授受の場面での学習者のウチ・ソト関係の判断を類型ごとにみてきた。その結果、初中級レベルの学習者には、「くれる」を避ける傾向が見られる。これは、学習者の母語の影響もあると思われる。キルギス語には「くれる」という授受本動詞がなく、日本語の「あげる」と「くれる」の2つに対してキルギス語の「beruu」1つが対応する。

例:彼は私に本をくれた。 Al maga kitep berdi.

私は彼に本をあげた。 Men aga kitep berdim.

キルギス語の文書の順序は日本語の文書と同じくSOV(subject object verb)型で、

主語が前に、動詞が文書の終わりにくる。キルギス語の動詞は人称、時制によって固有の語尾を持っている。この文書での単語: Al-彼、maga-私に、kitep-本、beruu-くれる/あげる、berdi (3人称) - くれた(過去形)、men-私、saga-あなたに、berdim (1人称) - あげた(過去形)。

つまり、キルギス語には「くれる」と「あげる」の区別がないので、これが、学習者にとって難しかったと言える。

また、初中級レベルの学習者は、「あげる」と「くれる」より、「もらう」をよく使用することが明らかになったが、実際には誤った使われ方(意味の誤り)も非常に多いことが分かる。

初中級レベルの学習者は意味の誤りをよくおかしているが、中級レベルの学習者にはこの誤用があまり見られない。このことから、授受本動詞における意味の誤りは、日本語レベルが高くなるにつれてなくなっていくことが明らかになった。

また、中級レベルの学習者によく見られる視点の誤りの中で、「あげる」と「くれる」の混同は、坂本・岡田(1996)、堀口(1983)と尹(2006)の結果と同じであった。しかし、「あげる」を「くれる」とする誤りのほうが、「くれる」を「あげる」とする誤りより多かった。

また、学習者のレベルを問わず、「もらう」を適切なところで使用しないことが本調査によって明らかになった。キルギス人学習者にとって、授受本動詞における与え手と受け手の位置づけは日本語が上達するにつれ習得されるが、視点の置き方は日本語が上達されても習得されにくいことを示している。

以上のことから、キルギスの日本語教育現場では、「あげる」と「くれる」との使い分けとともに、「もらう」の意味と視点についても詳しく教示する必要があることが示唆された。

今回は、キルギス人日本語学習者を対象に調査を行い、授受本動詞の誤用例からみて、考察を行った。集めた例で一番多かった誤用は「もらう」で、また、使うべきところに、あるいは使った方が自然であるところに使えないというものである。これは、質問紙調査の設定の不足も影響を与えているのではないだろうか。今回の調査では、質問紙の問題を設定する時、聞き手は誰なのかは設定されなかったため、この結果になったのではないかと考えられる。なぜなら、日本語では、聞き手は誰かによって、授受動詞は変わってくるからである。今後の調査では、聞き手が誰なのか分かる設定にして、「ウチ・ソト場面」を作成する必要があると思われる。

4-2. キルギス人日本語学習者の授受表現における視点の置き方について

日本語学習者にとって、授受動詞の使用に誤用が多く生じる理由は、日本語の授受動詞における視点の置き方が難しいことが考えられる。ここでは、授受本動詞におけるキルギス人日本語学習者の視点に着目し、授受本動詞において、与え手及び受け手の2つに設定して、その相違が誤用を生む要因としてどのように関与しているかを検討する。なお、キルギス語の授受本動詞の使用には、日本語の授受本動詞のように話し手の視点は関係してこない。

学習者の回答の正解・不正解にかかわらず、調査問題の全体の、学習者の視点が与え手及び受け手のどちらに置かれているかを調べてみた。

表2は、キルギス人日本語学習者の調査回答全体における視点の置き方である。

表2 キルギス人日本語学習者の調査問題全体における視点の置き方

授受 本動詞	学習者の レベル	視点の置き方 与え手	視点の置き方 受け手
あげる	初中級	88% (全 24 例文)	12% (全 3 例文)
	中級	85% (全 28 例文)	15% (全 5 例文)
もらう	初中級	100% (全 28 例文)	0.0% (全 0 例文)
	中級	100% (全 44 例文)	0.0% (全 0 例文)
くれる	初中級	89% (全 8 例文)	11% (全 1 例文)
	中級	82% (全 9 例文)	18% (全 2 例文)

レベルの違いを問わず、学習者の約8割以上は、文を与え手から描いていることが表2を見て分かる。では、物の授受方向によって学習者はどのように授受本動詞を使っているのだろうか。

まず、物の授受方向が「話し手(話し手に近い人)→他者」の場合、学習者は渡す側から描いて、約5割は正用の「あげる」を使用している。

残りの5割は、初中級レベルの学習者は「もらう」を使用し、意味の誤りをおかしているが(⑧)、中級レベルの学習者は「くれる」を使用し、視点の誤りをおかしている(⑨)。

⑧(問8)「友達は先生にネクタイをもらった。」

⑨(問9)「友達は先生にネクタイをくれた。」

次に、物の授受方向が「他者→話し手(話し手に近い人)」の場合、学習者全員が渡す側から描いており、正用の「もらう」より、「あげる」と「くれる」を積極的に使っていることが分かった。なお、誤用の分類で見ると、初中級レベルの学習者は意味の誤り「他者が～もらう」(⑩)、中級レベルの学習者は視点の誤り「他者が～あげた」(⑪)をおかしている。

⑩(問5)「母の同僚は母にスカーフをもらった。」

⑪(問5)「母の同僚は母にスカーフをあげた。」

次は、物の授受方向が、「他者→他者」で親疎が異なった場合であるが、ここでも学習者が、渡す側の人から描いている文がほとんどである(⑫)。

⑫(問4)「ラオせんばいは友子せんばいに本をあげた。」

上記の結果から、学習者は、日本語の授受の視点を一切考えずに、どの類型でも渡す側から描いている可能性が高い。これは、学習者の母語の影響もあると思われる。キルギス語では、文を渡す側から描くのは普通のことだからである。

従って、このような誤用が起こらないようにするために、教室で教える時、一番強調する必要があるのは、「あげる」「くれる」「もらう」の与え手、受け手、話し手の視点という要素による使い分けである。教師は、ウチ・ソト関係、視点の置き方などを判断した上で文を作らせる、また実際に使わせてみるなどの方法を使って工夫したほうがよいだろう。

今回は、キルギス人日本語学習者の授受本動詞の使用について、視点の観点から、学習者の視点が与え手及び受け手のどちらに置かれるかの相違が誤用を生む要因としてどのように関与しているかを中心に考えてきた。その結果、授受本動詞の誤用には与え手及び受け手の相違が誤用に影響を与える可能性が示された。

キルギスの教育現場で、日本語授受本動詞がどのように指導されているかについては、今後の調査により明らかにしなければならないが、ここでは、今回の調査結果を踏まえ、指導上のポイントと、注意すべきところを述べてみたい。

まず、学習者は、「あげる」「くれる」「もらう」という授受本動詞による使い分けがまだきちんとできていない。これらを踏まえた上で、教師が、従来の指導法に加え、ウチ・ソト関係の理解を高めることを目指す新たな指導法が必要ではないかと考えられる。

学習者は、与えられた場面の情報を考慮しない傾向がある。教師は授受動詞を教える際に、まず場面を処理してから授受動詞を使うことを、導入また練習の時によく確

認したほうがよいだろう。

また、登場人物の多いウチ・ソトのトレーニングが必要であろう。教師は、受け手はどちらか、与え手はどちらか、といった基本的なトレーニングをきちんと行うことで正答率が上がるだろう。

5. まとめ

本稿では、キルギス人日本語学習者を対象に、授受本動詞の「あげる」「くれる」「もらう」の誤用を調査した。その結果、次のことが明らかになった。1) 学習者が、日本人の考えているウチ・ソト関係をまだ十分理解していない。学習者が問題に取り組む際、自分にとって近い関係の人と遠い関係の人という情報を考慮しないまま、与え手側から描く傾向が見られる。2) 授受本動詞の意味の誤りは日本語が上達するにつれて改善される。3) 授受本動詞における視点の置き方は日本語が上達しても改善されにくい。

今回の調査ではレベルを問わず学習者の授受本動詞の習得が進んでいないことが明らかになった。この調査では、選択問題による質問紙を用いたが、正誤の判断ができるからといって、自分で文を産出できるとは限らない。実際に授受本動詞が産出できるかどうかといった調査が今後必要となるであろう。

注

- 1) キルギス語では、授受を表す動詞は *aluu* (日本語訳は「もらう」) *beruu* (日本語訳は「あげる」) の2項。ロシア語では、授受を表す動詞は *brat'* (日本語訳は「もらう」) *dat'* (日本語訳は「あげる」) の2項。
- 2) 「ウチ」とは、話し手の家族や話し手が所属している組織の一員など、話し手が自分寄りの立場にあると考えている人物のことで、「ソト」はそれ以外の第三者のことを指す。

参考文献

- 堀口純子(1983)「授受表現にかかわる誤りの分析」『日本語教育』52, pp. 91 - 103.
- 益岡隆志(2001)「日本語における授受動詞と恩恵性」『言語』30, pp. 26 - 32.
- 宮地裕(1965)「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について」『国語学』63, pp. 22 - 34.
- 荻野千砂子(2007)「授受動詞の視点の成立」『日本語の研究』3, pp. 1 - 16.
- 奥津敬一郎(1983)「授受表現の対照研究—日・朝・中・英の比較—」『日本語学』4, pp. 22 - 30.
- 大塚純子(1995)「中上級日本語学習者の視点表現の発達について—立場志向文を中心に—」『言語文化と日本語教育水谷信子先生退官記念』9, pp. 281 - 292.
- 坂本正・岡田久美(1996)「日本語の授受動詞の習得について」『アカデミア. 文学・語学論』61, pp. 157 - 202.

田中真理(1999)「OPIに現れた受身表現について:日本語教育とコミュニケーションの視点から」カッセンブッシュ寛子研究代表『第二言語としての日本語の習得に関する総合研究』平成8-10年度科学研究費補助金研究成果報告書 pp. 335-350.

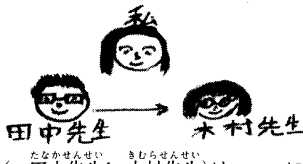
渡辺裕司(1992)「授受表現における授受の方向性」『日本語学校論集』18, pp. 35-48.

山田敏弘(2001)「日本語におけるベネファクティブの記述的研究」『日本語学』13, pp. 100-110.

尹喜貞(2006)「授受補助動詞の習得に日本語能力,及び学習環境が与える影響-韓国入学者を対象に」『日本語教育』130, pp. 120-129.

資料 1

問1

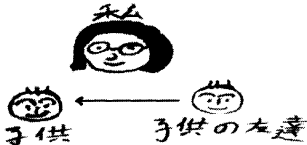


(a. 田中先生 b. 木村先生)は_____にコップを(a. もらった b. くれた c. あげた)

Танака мой преподаватель. Кимура сенсей мне не преподает. Кимура с Танака работают вместе.

(日本語訳: 田中先生は私の先生です。木村先生と田中先生は一緒に働いています。でも木村先生は私の先生ではありません。)

問2

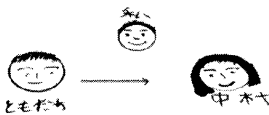


(a. 子供 b. 子供の友達)は_____にりんごを(a. もらった b. くれた c. あげた)。

Мой сын и его школьный друг. Я его друга не знаю.

(日本語訳: 私の子供と子供の友達。私は子供の友達のことを知りません。)

問3



(a. 中村 b. 友達)は_____に雑誌(ざっし)を(a. もらった b. くれた c. あげた)。

Накамура коллега моего друга. Я с Накамурой незнаком.

(日本語訳: 中村は私の友達の同僚です。私は中村のことを知りません。)

問4

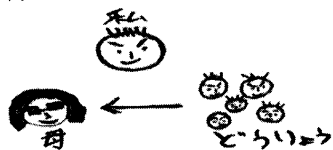
Томото сенпай была сенпай и в школе и сейчас университете. Мы до сих пор в хороших отношениях. С Рао сенпай только один раз поговорила.



(a. ラオ先輩 b. 友子先輩)は_____に本(ほん)を(a. もらった b. くれた c. あげた)。

(日本語訳: ラオ先輩と友子先輩は大学の先輩です。友子先輩は高校からの先輩で、今とても仲がいいです。ラオ先輩とは1回しか話したことがないので、あまり仲がよくありません。)

問5

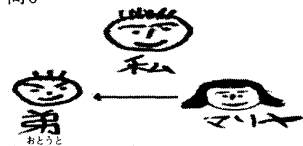


Моя мама и ее коллеги. Я незнакома с ее коллегами.

(日本語訳: 私の母と母の同僚たち。私は母の同僚たちのことを知りません。)

(a. 母^{はは} b. 母のどうりょう^{はは})は_____にスカーフを(a. もらった b. くれた c. あげた)。

問6



Мария знакомая моего брата. Я ее никогда не видел.

(日本語訳: マリアは弟の知り合いです。

私はマリアのことを知りません。)

(a. 弟^{おとうと} b. マリア)は_____にCDを(a. もらった b. くれた c. あげた)。

問7



Моя сестренка и ее коллега. Я с ее коллегой незнакома.

(日本語訳: 私の妹と妹の同僚たち。

妹の同僚たちのことを知りません。)

(a. 妹^{いもうと} b. 妹のどうりょう^{いもうと})は_____に傘^{かさ}を(a. もらった b. くれた c. あげた)。

問8



Преподаватель моего друга. Преподавателя я незнаю.

(日本語訳: 先生は友達の先生です。

その先生のことを知りません。)

(a. 友達^{ともだち} b. 友達の先生^{ともだち せんせい})は_____にネクタイを(a. もらった b. くれた c. あげた)。